

自然遊学館

だより

2018 SUMMER

No.88



ドーソン石

化石の一大産地として知られる泉州地方ですが、その化石と一緒によく見られるのが、雪の結晶のようなドーソン石です。 (撮：藤浦 淳)

2018.8.15 発行 貝塚市立自然遊学館

目 次

***ネイチャーレポート**

ナツノツヅレサセココロギ・・・ 岩崎 拓・澤田智子・・・1

***行事レポート**

渚の生きもの・・・ 山田浩二・・・ 2

野草ちらし寿司とよもぎ餅作り・・・ 湯浅幸子・・・ 4

二色の浜稚魚放流・・・ 澤田智子・・・ 5

宝の石の話シリーズ1

海と山をつなぐ鉱物 (藤浦淳氏講演会)
・・・ 澤田智子・・・6

***泉州生きもの情報**

プールのヤゴからスナアカネが羽化
・・・ 岩崎 拓・澤田智子・・・7

阪南市沖で採集された
ベニホシマンジュウガニ・・・ 山田浩二・・・8

***館長コーナー**

近木川のアユ調べとホテルの寝床調べ
・・・ 高橋寛幸・・・ 9

***調査速報**

千石荘昆虫調査 2017・・・ 岩崎 拓・・・ 12

貝塚市二色の浜と近木川周辺の鳥調査9
・・・ 鈴木勝也・・・ 14

二色の浜アマモ場観察・・・山田浩二・・・ 15

***寄贈標本**・・・ 16

***お知らせ**・・・ 20

***スタッフ日誌**・・・ 21



◆ ネイチャーリポート

ナツノツヅレサセコオロギ

コオロギと言えば秋に鳴くものと相場が決まっているようですが(?)、6月前後から鳴くコオロギも少しいます。キンヒバリ、カヤヒバリ、シバズ、マダラスズなどのヒバリモドキ科の小さなコオロギ以外にも、コガタコオロギやタンボコオロギなど中型の種もいます。その2種より数は少ないのですが、ナツノツヅレサセコオロギ(以下、ナツノツヅレサセ)もそういった部類に入ります。大型のものでは、本誌49号で紹介したタイワンエンマコオロギがいます。

秋に鳴くエンマコオロギ、ハラオカメコオロギ、ミツカドコオロギ、ツヅレサセコオロギなどは卵越冬で、春にふ化して夏を幼虫で過ごし秋に成虫になる生活史を送ります。それに対して、コガタコオロギ、タンボコオロギ、ナツノツヅレサセは幼虫で越冬します。

ナツノツヅレサセは大阪府レッドリスト2014で準絶滅危惧に指定されていますが、今回採集した千石荘のほかでも、二色の市民の森や貝塚人工島で鳴き声を確認しています。探せば市内の他の場所でも確認できると思います。

秋の夜長にリー・リー・リー・リー・・・と途切れることなく鳴き続けるツヅレサセコオロギなら、秋を代表的する鳴く虫なので知っているという方もいると思います。それと鳴き声がとても似ています。鳴く時期が同じなら、この2種の鳴き声の聞き分けは自分には出来ません。外部形態も

似ていますが、『バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑』によると、オス交尾器で見分けることが出来るそうです。

今回のような6月の鳴き声なら確実にナツノツヅレサセです。2015年から千石荘で始めた大人対象の「千石荘講座(調査)」では、6月と7月の課題としてナツノツヅレサセの採集をあげていました。というのも、鳴き声は聞こえるものの(昼間でも)、草の根元に潜んでいるため採集が難しく、自然遊学館に標本がなかったからです。

ところが今年の6月8日の講座の時は、朝から小雨模様で薄暗く、中止にしようかなと思うような天候でした。いつもの鳴き声がする場所に着くと、道の真中で鳴いていて、近づくとも数個体が跳ねました。たぶん10個体以上はいたでしょう。拍子抜けするほど簡単に採れる状況になり、4個体(2♂1♀1終齢幼虫)を標本にすることができました。



ナツノツヅレサセコオロギ♂ (体長15mm)

貝塚市のバッタ目の記録としては、今回のナツノツヅレサセの採集で、コオロギ科にヒバリモドキ科、マツムシ科、カネタタキ科、アリツカコオロギ科、ケラ科を含め

たコオロギ類では 35 種目、バッタ目全体では 102 種目となりました。

引用文献

『バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑』（日本直翅類学会（市川顕彦・伊藤ふくお・加納康嗣・河合正人・富永 修・村井貴史）編、2006 年・北海道大学出版会発行、687pp.）

（岩崎 拓・澤田 智子）

行事レポート

渚の生きもの

日時：2018 年 5 月 27 日（日）13:00～15:30

場所：近木川河口

参加者：61 人

昨年秋の台風の影響で河口に土砂がたまり、様子が大きく変わった中での観察会となりました。小学生以上の参加条件でしたが、広報に出るや、申し込みが定員 50 人を超え、早々に締め切らせて頂きました。講師には昨年同様、魚の専門家である日下部敬之さん、貝の専門家である大古場 正さんに来て頂きました。この日の観察記録は、大阪湾生き物一斉調査（第 11 回）の結果としても報告します。

集合場所の現地で、挨拶、行事の流れをお話した後、さっそく地曳網を始めました。この日は最干潮が正午前でしたので、干潟の面積が広いうちに、大勢の引手の足場が必要な地曳網を行いました。例年に比べ、網に入るアナアオサの量が少なく、割と楽に網を上げることができました（図 1）。



図 1. 地曳網で捕れた生きものを探す

成果の方は、2 回の網入れで、スズキ、ウミタナゴ属、クロダイのいずれも幼魚など、計 9 種、71 匹の魚が捕れたにとどまりました（表 1）。昨年に引き続き、標識をつけて放流されたトラフグの幼魚も入りました。

後半は自由採集に移り、テトラポッドに付着した貝類や、転石の下に隠れたカニ、浅瀬の小魚などを採集しました（図 2）。1 時間ほどでしたが、参加者の採集したものを大きなトレーに集めると、たくさんの生きものたちでウジャウジャといった状態になりました。



図 2. 河口で生きものを探す

最後に観察会のまとめとして、前半の地曳網、後半の自由採集で採れた生きものを合わせて、講師の方々より解説頂きました。巻き貝のウミニナは大阪府レッドリスト2014では準絶滅危惧種に選定されていますが、現在の近木川河口ではたくさん見かける普通種となっています。貝類は計13種で、昨年30種だったことに比べると河口環境の大きな変化によって大きく減少しているといえます。

また、たくさんのケフサイソガニなどのカニが入った容器の中にヒメヒライソモドキ(図3)が1匹いるのを確認しました。本種は大阪府レッドリスト2014では絶滅危惧Ⅱ類に選定され、近木川河口では2009年に数個体が記録されて以降、久しぶりの確認になりました。

自由採集で採れた動物のリストは表2に、海岸に打ち上げられた海藻類は表3に記しました。



図3. ヒメヒライソモドキ
雌、甲幅 7.8 mm

表1. 近木川河口地曳網 (網入れ2回) 2018年5月27日

グループ	目	科	和名	個体数
魚類	スズキ目	ボラ科	ボラ	1
		フサカサゴ科	タケノコメバル	2
		カジカ科	サラサカジカ	1
		スズキ科	スズキ	46
		タイ科	クロダイ	5
		ウミタナゴ科	ウミタナゴ属	8
		メジナ科	メジナ	2
		ハゼ科	ヒメハゼ	4
	フグ目	フグ科	トラフグ	2
甲殻類	十脚目	テナガエビ科	スジエビモドキ	2
			ユビナガスジエビ	5

表2. 近木川河口で観察した海岸動物 (地曳網除く) 2018年5月27日

グループ	和名		
刺胞動物門	花虫綱 タテジマイソギンチャク科 タテジマイソギンチャク		
軟体動物門	腹足綱 ニシキウスガイ科 イシダタミ		
	アマオブネガイ科 イシマキガイ		
	ウミニナ科 ウミニナ		
	タマキビガイ科 タマキビ		
		アラレタマキビ	
		マルウズラタマキビ	
	アツキガイ科 イボニシ		
	ムシロガイ科 アラムシロ		
	カラマツガイ科 カラマツガイ		
	二枚貝綱	イガイ科 コウロエンカワヒバリガイ	
		イタボガキ科 マガキ	
		チドリマスオ科 クチバガイ	
		マルスダレガイ科 アサリ	
環形動物門	多毛綱 ゴカイ科 アシナガゴカイ		
	カワゴカイ属		
節足動物門	顎脚綱 イワフジツボ科 イワフジツボ		
	クロフジツボ科 クロフジツボ		
	フジツボ科 タテジマフジツボ		
		シロスジフジツボ	
		アメリカフジツボ	
		ミヨウガイ科 カメノテ	
	軟甲綱	ユンボソコエビ科 ニホンドロソコエビ	
		フナムシ科 フナムシ	
		テナガエビ科 スジエビモドキ	
			テナガエビ
ホンヤドカリ科 ユビナガホンヤドカリ			
ガザミ科 チチュウカイミドリガニ			
モクスガニ科 ヒメヒライソモドキ			
		モクスガニ	
		ケフサイソガニ	
		イソガニ	
	ヒライソガニ		
	ベンケイガニ科 カクベンケイガニ		
	スナガニ科 ハクセンシオマネキ		
	オサガニ科 ヤマトオサガニ		
昆虫綱	ハサミムシ科 ハマベハサミムシ		
	コガネムシ科 ナミハナムグリ		
	ハネカクシ科 ウミベアカバハネカクシ		
	ゴミムシタマシ科 オオスナゴミムシタマシ		
	ハムシ科 イモサルハムシ		
	タマバチ科 バラハタマバチ(虫えい)		
	アリ科 アミメアリ		
脊索動物門	クモ綱 コガネグモ科 ゴミグモ		
	軟骨魚綱	アカエイ科 アカエイ	
		ボラ科 ボラ	
	硬骨魚綱	ハゼ科 ミミズハゼ属	
			ドロメ
			マハゼ
			アベハゼ
			イシガレイ
			トラフグ
		カレイ科	
	フグ科		

同定者: 日下部敬之(魚類)、大古場正(貝類)、山田浩二(その他水生)、岩崎拓(陸生)

表 3. 近木川河口の打ち上げ海藻類

海草	アマモ
緑藻	アナアオサ スジアオノリ
褐藻	アカモク イソモク タマハハキモク フトモズク
紅藻	ムカデノリ フダラク

同定者：河添純子

(山田 浩二)

野草ちらし寿司とよもぎ餅作り

日時：2018年6月2日(土)10:00~14:00

場所：自然遊学館多目的室

参加者：21人

自然遊学館は、埋立地に建てられた施設です。埋立地は30年たち、木々も育ち雑草も生え、帰化植物が多いのですが、スミレ類など季節ごとの植物を楽しむことができます。

今回、周辺の植物を観察しながら、食べる事が出来る植物を探すのですが、まずよもぎ餅に入れるヨモギを集めました。ヨモギは、ほぼ年中身近で採れる植物です。春先の柔らかい葉はありませんが、今の季節もやわらかそうな葉だけを集め、湯がいて水によくさらしておきました(アクをとる)。

ヨモギをさらしている間に空地の植物観察をしました。乾燥した裸地ですが、アカバナリハコベ、ハナハマセンブリ、などが可愛い花をつけ、また穂の形が変わったコバンソウが人気でした。37種(うち帰

化植物20種)見つけることができました。採集した植物は家族毎に、紙の上に広げて名前などを調べました(図1)。



図 1. 空き地でみつけた植物

さらしたヨモギの葉を刻んで餅つき機に入れるのですが、ヨモギを刻むのは堅かったようです。よもぎ餅の他ちらし寿司も用意。先ほどの植物の可食の葉を湯がいてトッピングして試食しました(図2)。(時期的に可食の葉などは堅くアクも強く、ほとんどなかったのは、残念でした。)



図 2. 野草ちらし寿司の試食

(湯浅 幸子)

二色の浜稚魚放流

日時：2018年6月23日(土)14:00～15:00

場所：二色の浜

参加者：33人（子供15人）

大阪府漁業振興基金栽培事業場との共催

協力：NPO 法人大阪府海域美化安全協会

朝から雨が降り、開催も危ぶまれた今年の「稚魚放流」でしたが、天気が悪いなかでも33人も参加者が集まってくださり、無事100匹近いヒラメを放流することができました。

この行事は、大阪府漁業振興基金栽培事業場より提供いただいたヒラメの稚魚（図1）をみんなの手で海に放流してあげる毎年恒例の人気行事です。



図1. 放流前のヒラメ幼魚

最初に、水産技術センター長の米田氏からヒラメの生態について教えて頂き、

- ・ 天然ヒラメの下面側は白いが、水槽で育った放流ヒラメはまだら模様になること
- ・ それが災いして放流ヒラメは安い値段がつけられてしまうこと
- ・ まだら模様は放流ヒラメの証なので、放流した成果が測りやすいというメリットもあること

- ・ ヒラメとカレイの見分け方とその謎などを教わりました。



図2. 二色の浜の海への放流

そして、メインイベントであるヒラメ放流がスタート！ 幸運なことに、子供たちが一斉にヒラメをすくい始めた頃には雨も上がり、まるで子供たちの興奮が雲を押しつけたようでした。

子供たちのやるべきミッションは「①ヒラメ水槽から小さなバケツに2～3匹入れ、②砂浜を歩き、③波打ち際でヒラメを放つ」という簡単なものです。しかし、それぞれの胸の内には、さらに「④1匹でも多く自分の手で放つ」が加えられているらしく、ヒラメを放った後、猛ダッシュでヒラメ水槽に戻っていく勇ましい姿がみられました（図2）。

また、参加者のみなさんには本行事が二色の浜のクリーンキャンペーンの一環も担っていることを理解していただき、砂浜の移動時にたくさんのゴミを集めてくださいました。天候も悪いなか、本当にありがとうございました。

（澤田 智子）

宝の石の話シリーズ①

海と山をつなぐ鉱物

日時：2018年6月24日(日) 10:00～12:00

場所：自然遊学館多目的室

参加者：14人

「石」といえば、河原や山で見つける石を想像する方も多いでしょう。そう、そのとおり！今回の「石のはなし」は、そのどこにでもある石の中にある特別な石（鉱物）についての話です。

講師は、鉱物を収集して40年、貝塚市在住の藤浦淳さんです。産経新聞社にお勤めの知識も話題も豊富な鉱物博士です。講演は1時間半余りで、ここではその一部を紹介します。



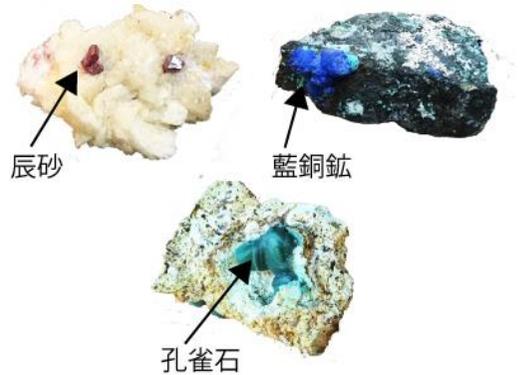
— 鉱物はどうやってできるのか —

地球の表面を覆うプレート（岩盤）が地中に沈んでいくと圧縮され、その熱でマグマだまりができます。その一部が地上に吹き出て、海底に超高温の熱水を吹き出す熱水噴出孔（チムニー）ができます。そのマグマから噴出孔に通じる道では、石灰岩などとマグマが接触し、さらに海水とも接触して化学反応が起き、様々な鉱物が生成されます。数億年かけて地上に押し上げられたその道（スカルン）を人類が発見し、鉱山として鉱物を掘り起こしてきました。

— 鉱物と人類の文化 —

鉱物は昔から人々にとって身近な存在でした。宝石としてはもちろんですが、それ以外にも多彩に利用されてきました。

有名な奈良県の高松塚古墳の壁画「飛鳥美人」には鉱物の辰砂（しんしゃ）が赤色、藍銅鉱（アズライト）が青色、孔雀石（マラカイト）が緑色の染料となり、鉱物を砕き溶かして色付けられています。



【きらめく石の世界展】より 自然遊学館にて特別展示

また、日本で豊富に産出されるモリブデンは爆薬にまぜると爆発力が増すことから、戦時中に多用されました。戦後直後にGHQが真っ先に行ったことの1つがモリブデンの鉱山を制圧することだったそうです。

現在でも鉱物は人々の生活に利用されており、絹雲母（セリサイト）はさらさらのパウダーになることからファンデーションに、石灰岩として純度の高い大理石は歯磨き粉にも利用されています。

— 大阪の石はドーソナイト —

2年前に日本鉱物学会が47都道府県の

泉州生きもの情報

プールのヤゴから スナアカネが羽化

代表的な石を発表しました。大阪の石は「ドーソナイト」という鉱物で、藤浦さんが書かれた産経新聞の記事には「泉州が誇る可憐な結晶」と表現されています。

大阪の和泉山脈には 6500 万年前の地層が広がり、さまざまな化石が見つかることから、化石の一大産地となっています。そして化石と一緒にみつかるのがドーソナイトなのです。



大阪泉州がほこる鉱物「ドーソナイト」

講演中、藤浦さんの口から「拾った」「見つけた」という言葉がよくでてきました。もちろん、簡単に鉱石を拾ったり見つけたりしたわけではなく、その場所に行くまで何キロも歩き、ほとんどは手ぶらで帰ることになり、大変な努力をされています。他にもたくさんの鉱物についてのお話や収集するに至る苦労されたお話をしてくださり、誰もが「一度でいいから自分の手で鉱物を見つけてみたい」と思わせられました。

そのチャンスがこの夏にやってきます！貝塚市内で見つかる可能性のある場所に、藤浦さんと参加者のみなさんで行ってきます。その成果は、次号にて。

(澤田 智子)

今年は、5月11日に貝塚市地蔵堂の市営第4プールで、5月14日に二色の第5プールでヤゴ救出作戦を行いました。第4プールは自然遊学館のスタッフだけ、第5プールは二色小学校と第5中学校の有志約60人も参加しました。両プールともヤゴの数はとても少なく、それぞれ100匹程度でアカネ属がほとんどを占めました。他は、ギンヤンマ、シオカラトンボ、アオモンイトトンボが少しだけでした。

第4プールから救い出したヤゴを館内で展示していると、5月14日から羽化が始まり、タイリクアカネが多かったのですが、見慣れないアカネも混じっていて、それがスナアカネ *Sympetrum fonscolombii* だと分かりました。脚の外側に黄白色の線が入ることと、翅の付け根が少し着色されていることが特徴です。スナアカネの「スナ」の意味は、『トンボ大図鑑』には、砂の色と書かれています。この辺りの砂浜の白い砂ではなく、例えば運動場の砂のような色をイメージしたのでしょう。

これまで自然遊学館に貝塚市内の標本はなく、アカネ属 (=アカトンボの仲間) として13種目、トンボ目全体では76種目の記録となりました。



羽化したスナアカネ♂（体長 38mm）

スナアカネはこれまで大阪府では記録が少なかったようですが、昨年の秋に泉大津市で成虫が記録されていました（平井規央、2017）。『近畿のトンボ図鑑』（山本哲央ほか、2009）によると、海岸近くの池沼に生息するそうなので、もしかしたら第5プールの方にもいた可能性があります。今回は、5月14日に第4プール産の2♂を標本にし、それ以後に羽化したものは逃がしました。

引用文献

平井規央（2017） 泉大津市でスナアカネを採集。
南大阪の昆虫 19：69.

杉村光俊・石田昇三・小島圭三・石田勝義・青木典司（1999） 『原色日本トンボ幼虫・成虫大図鑑』、北海道大学図書刊行会、917pp.

山本哲央・新村捷介・宮崎俊行・西浦信明（2009） 『近畿のトンボ図鑑』、いかだ社、239pp.

（岩崎 拓・澤田 智子）

阪南市沖で採集された ベニホシマンジュウガニ

ベニホシマンジュウガニ *Liagore rubromaculata* (de Haan, 1835) はオウギガニ科 Xanthidae ベニホシマンジュウガニ属 *Liagore* に属するカニで、相模湾以南の水深 10~30m の岩礁・砂礫・砂泥底に生息します（三宅、1983）。甲羅の表面は平滑で光沢があり、甲幅 40 mm ほどに成長します。和名の通り、紅色の円紋が甲面、ハサミ、歩脚に散在するのですが、その水玉模様は甲羅の真ん中を境にして左右対称になっています。

2018年6月23日、せんなん里海公園のある阪南市の沖合で、底曳網漁の漁獲物として、本種1個体が採集されました。得られた個体は雄で、甲長 26.4 mm、甲幅 36.0 mm でした。8月1日現在、この個体は貝塚市立自然遊学館の展示水槽で飼育されています。

大阪湾では小型底曳網で多くの魚類、大型甲殻類や軟体動物が漁獲されますが、その種組成についての報告はほとんどありません。数少ない記録として、大阪湾南部海域で 1981~1991 年にかけて実施された調査報告（有山ほか、1997）や岬町沖で 1994~1997 年にかけて実施された調査報告（有山・波戸岡、2003）がありますが、ここにベニホシマンジュウガニの記録はありません。

近年、日本海側の山口県で本種が記録され（本尾・土井、2008）、この報告の中で「本来九州・天草海域までにしか分布していなかった南方系の本種が温暖化する対馬暖流に支えられて北上分布を遂げつつあることの現れのように思える」と考察されています。

 **館長コーナー**

近木川のアユ調べとホタルの寝床調べ

本種は潮間帯より深い海域で生息しているため、海辺の観察・調査時などではもともと見かけることはありませんが、今後、大阪府沿岸での底曳網漁で本種の確認が増加してくるかもしれません。



図1. ベニホシマンジュウガニ

謝辞

本種を採集して下さった下荘漁業協同組合、当館に提供して下さった一般財団法人阪南市観光協会、せんなん里海公園管理事務所に厚くお礼申し上げます。

引用文献

有山啓之・矢持 進・佐野雅基 (1997) 大阪湾奥部における大型底生動物の動態についてⅢ. 出現種のリストおよび他海域・過去との比較. 大阪府立水産試験場研究報告 第10号: 19-27.

有山啓之・波戸岡清峰 (2003) 大阪湾南部岬町沖に生息する底生魚類, 大型甲殻類および軟体動物について. 大阪府立水産試験場研究報告 第14号: 37-55.

三宅貞祥 (1983) 「原色日本大型甲殻類図鑑(Ⅱ)」 277pp. 保育社, 大阪.

本尾洋・土井啓行 (2008) 山口県吉見沖で採集されたベニホシマンジュウガニ. ホシザキグリーン財団研究報告 第11号: 121-124.

(山田 浩二)

皆様お元気にお過ごしでしょうか? 日々の猛暑に夏の脅威を感じていることでしょう。(7月下旬のことでした)

先日、貝塚科学の祭典行事の『近木川の魚調査』の下調べとして生きもの調査に出かけました。この日は連日の猛暑日のため外での活動が制限されていたころでした。あまりの暑さに行事実施が危ぶまれました。そこで、現地の下調べと共に気温を調べてみようということになりました。その結果です。(気温の単位は℃)

近木川調査に伴う気温調べ

平成30年7月25日(水)～26日(木)

7月25日(水)

河原(砂地)	測定時刻	10:30
地面(地表0m)	40.1	気温
日陰(地表1m)	32.8	気温
日向(地表1m)	34.6	気温

水温29.4

観察場所	測定時刻	11:10
地面(地表0m)	38.1	気温
日陰(地表1m)	30.0	気温
日向(地表1m)	31.6	気温

7月26日(木)

河原(砂地)	測定時刻	9:34
地面(地表0m)	42.1	気温
日陰(地表1m)	31.9	気温
日向(地表1m)	34.6	気温

水温30.1

観察場所	測定時刻	10:33
地面(地表0m)	42.1	気温
日陰(地表1m)	29.4	気温
日向(地表1m)	33.6	気温

温度計はA(室内温度計) B(カシオプロトレック) C(アルコール棒温度計)の3台を使いました。3台の測定値の平均を求め、それぞれの数値との差を測定誤差とし修正しました。二日とも地表付近の温度は40度を超え、日陰との差に驚かされました。



右から棒温度計、室内温度計、プロトレック



気温測定場所 右が観察場所、左が河原(砂地)

この時の生きもの調べではアユは見つからず、オイカワやゴクラクハゼ、ボラなど幾種類かの魚を確認しました。

さて、ここから本題の報告になります。前回、近木川のアユ調査ボランティア(以後ボランティアとします)を募集し調査を始めたことのお知らせしました。

4月下旬から6月初旬にかけてボランテ

ィアの方の協力を得てアユ調べを行った結果を以下にまとめました。

平成30年度近木川のアユ調べ

(上期4月~6月)報告

1回目2018年(平成30年)4月28日(土)

天気:快晴

観察場所:近木川河口から約650m上流
新井井堰付近

観察時刻:午後1時~2時

観察者:アユ観察ボランティアとして募集
により集まった方々4人

自然遊学館より:高橋、鈴子、山口

観察結果:タモ網と投網にて調査するも収穫なしで終了

2回目以降のボランティアによるアユ調べ
調査日とアユの捕獲数

(網にかかったアユを確認するも回収途中で逃げたものも含む数)

2回目 5月12日(土) 3

3回目 5月26日(土) 12

4回目 6月2日(土) 6

新井井堰でのボランティアによるアユ調査は6月2日でいったん終了し、9月に再開の予定を伝え前半のアユ調べは終了しました。このほかに、ボランティアの方から館に寄せられたアユ情報により館職員による任意調査も行われました。その結果を以下に記します。

5月4日(金) 5、 5月6日(日) 8、

5月17日(木) 5、 6月17日(日) 1



5月6日の投網にかかったアユ、この後川に放流



貝塚市堤で捕獲したアユとオイカワ
6月10日撮影

今回のアユ観察会で捕獲したアユの中から、数匹を展示用に館に持ち帰りました。



館内水槽の捕獲したアユ 5月27日撮影

近木川の新井井堰とは別の場所で、アユ発見の情報が寄せられました。その場所は、新井井堰よりさらに上流へ進み、近木川が国道26号線下をくぐった場所から200mほど上流でした。アユが泳いでいるとの情報が寄せられたのは6月4日。情報を寄せてくださったのは堤在住の方でした。そこで、6月9日、館職員により投網による調査を行いました。

今回のアユの調査により、近木川にアユが泳いでいることは間違いのないことになりました。春にボランティアを募り調査でアユが確認できたことで、館の秋の行事『近木川のアユを調べよう』は大いに盛り上がることだと思います。皆様、ぜひ秋の『近木川のアユを調べよう』に参加して、近木川を泳ぐアユをご覧ください。

他にもボランティアの方々とは、近木川の追加調査として、上流のホタルの寝床調査を行いました。実施日は6月9日（土）と6月16日（土）の二日間でした。

館の職員と一緒に近木川の上流、蕎原でポイントを幾つか決めホタルの幼虫、餌となるカワニナを調べました。



6月16日、畑上橋下での調査の様子

今回のホタルの寝床調べでは、カワニナを少しだけ確認できましたが、数は少なく、十分な数というには程遠いことが分かりました。

毎年、蕎原でホタルは飛び交いますが、まだまだ数は少ないようです。まず、カワニナを増やすことがホタルを増やすことにつながることから、カワニナが育つ環境を作らなければならないということを強く感じました。

今後もボランティアの皆様と力を合わせて近木川に多くのアユが泳ぎ、上流では蛍が飛び交う日を夢見て観察を続けてまいります。ボランティア調査に興味のある方は是非当館までお知らせください。

(高橋 寛幸)

調査速報

千石荘昆虫調査 2017

貝塚市千石荘において 2017 年 4 月から 12 月までの各月に 1 回ずつ 3 時間程度の昆虫調査（ルートセンサス・任意調査）を行いました。その結果、および以前の記録との比較を報告します。

1. 大阪府レッドリスト種

2017 年の調査では、『大阪府レッドリスト 2014』の指定種として、いずれも準絶滅危惧のキイトンボ、ウチワヤンマ、ナツノツヅレサセコオロギ、ジュウサンホシテントウ（図 1）が確認されました。ジュウサンホシテントウは、本誌 79 号で、2015 年

に海塚の空地で採集されたことを報告しましたが、それに続く、2 例目となりました。テントウムシ科の中では、細長い体型と長い脚を持っているのが特徴です。



図 1. ジュウサンホシテントウ
(コウチュウ目テントウムシ科、2017. 7. 3)

ほぼ毎年確認されていたベニイトトンボは 5 年ぶりに確認なしとなりました。これまで記録のあったアキアカネ、ナツアカネ、ノシメトンボ、ヨツボシトンボなどは確認されず、トンボの仲間は寂しい結果となりました。

2. 注目種

今後も調査を続けて、千石荘の里山的環境の指標となるような種を選んでいきたいと考えています。2017 年に確認された注目種は、カンタン、ショウリョウバッタモドキ、ナナフシモドキ、アミメクサカゲロウ、カブトムシの 5 種でした。特にナナフシモドキは 2013 年から 3 年間記録がなく、昨年注目種に加えたものです（図 2、本誌 83 号）。



図2. ナナフシモドキ
(ナナフシ目ナナフシ科、2017. 8. 1)



図3. ヤツメカミキリ
(コウチュウ目カミキリムシ科、2017. 6. 6)

ハチモドキハナアブは、2013年まで毎年、クヌギ周りで確認されていたのに、2014年以降はぱったりと確認されなくなり、2017年も同様の結果となりました。

3. その他

国内侵入種のアカハネオンブバッタが市内で見つかったのが2013年で(本誌73号)、2016年には千石荘でも確認されました。2017年は元々いた同属のオンブバッタがまったく確認されず、アカハネオンブバッタだけになってしまいました(7/3:2♂1♀、9/14:1♂、10/3:5♂2♀)。

これまで自然遊学館には蓄原や木積の標本しかなかったヤツメカミキリを6月6日にサクラ類の衰弱木で採集しました。サクラ類の枯木や衰弱木がそこそこある千石荘は、それが幼虫の餌であるヤツメカミキリにとっては「良い」生息地である可能性もあります。

2017年の調査で初標本となった種は、アオヘリアトキリゴミムシ、ホソスジナミシヤク、コシアキハバチの3種でした。ただし、コシアキハバチは吉田浩氏による2009年の採集記録があります(吉田・岩崎、2012)。

最後に、2017年調査の速報として紹介した種の確認日(月/日)を示しました。*印は幼虫での確認、その他の無印は成虫での確認です。

大阪府レッドリスト種(準絶滅危惧)

キイトンボ 7/3、8/1

ウチワヤンマ 7/3、8/1

ナツノツヅレサセコオロギ 7/3

ジュウサンホシテントウ 7/3

注目種

カンタン 10/3、11/7

ショウリョウバッタモドキ 8/1*、10/3、11/7

ナナフシモドキ 8/1

アミメクサカゲロウ 7/3

カブトムシ 4/13*、5/2*、6/6*、8/1

自然遊学館に標本がなかった種

アオヘリアトキリゴミムシ 11/7

ホソスジナミシヤク 7/3

コシアキハバチ 4/13

その他

アカハネオンブバッタ 7/3、9/14、10/3

ヤツメカミキリ 6/6

引用文献・参考文献

『大阪府レッドリスト2014』（大阪府、2014）
 吉田 浩・岩崎 拓（2012） 貝塚市のハバチ類. 貝塚の自然 14 : 37-46.



(岩崎 拓)

ツバメ
 (二色の浜公園 2018年6月27日)

貝塚市二色の浜と 近木川周辺の鳥調査 9

左岸側から右岸側をふさぐ感じに近木川河口の地形が変わっていたのですが、春の大雨が降った日に真ん中の部分が貫通しました。



近木川河口の地形
 (右岸側からの撮影)

今回は、4月～6月の鳥調査の報告です。

ツバメが子育てをし始めるのを見て、春になったと感じます。尾がまだ短かったなので、今年生まれのツバメです。

二色の浜公園周辺において2018年4月～6月に観察された鳥類						
目	科	種	4月	5月	6月	
			18日 13:10	16日 13:20	16日 13:25	27日 13:25
			鈴子	鈴子	鈴子	鈴子
カモ目	カモ科	ヒドリガモ	○			
		カルガモ	○	○		
		コガモ	○			
ハト目	ハト科	キシバト	○	○	○	
		ドバト	○	○	○	
カツオドリ目	ウ科	カワウ	○	○	○	
ペリカン目	サギ科	アオサギ		○	○	
		ダイサギ	○	○	○	
		コサギ	○	○	○	
チドリ目	チドリ科	コチドリ	○	○	○	
		シロチドリ	○	○		
		メダイチドリ	○	○		
	シギ科	チュウシャクシギ		○		
		アオアシシギ	○			
		キアシシギ		○		
		トウネン		○		
	カモメ科	ハマシギ		○		
		ウミネコ			○	
		コアジサシ		○	○	
タカ目	タカ科	トビ	○			
スズメ目	カラス科	ハシボソガラス		○	○	
		シジュウカラ		○		
	シジュウカラ科	シジュウカラ		○		
		ヒバリ	○	○	○	
	ツバメ科	ツバメ	○	○	○	
	ヒヨドリ科	ヒヨドリ	○	○	○	
	ウグイス科	ウグイス	○			
	ヨシキリ科	オオヨシキリ		○		
	ムクドリ科	ムクドリ	○	○	○	
	ヒタキ科	シロハラ	○			
		ツグミ	○			
スズメ科	スズメ	○	○	○		
セキレイ科	ハクセキレイ	○	○	○		
アトリ科	カワラヒワ	○	○	○		
		種数	23	25	17	

(鈴子 勝也)

近木川河口の方では、チドリの仲間が多く見られるようになりました。



シロチドリ
(近木川河口 2018年7月4日)

二色の浜アマモ場観察

2018年4月21日、22日、27日、30日の4日間をかけて、二色の浜の離岸堤の内側に自生するアマモ場(図1)を観察しました。ちょうどアマモの花が開花する時期で、ところどころの株で開花しているのを確認しました(図2)。

アマモの葉上で見られるウミナメクジ、マツモウミウシ、モロハタマキビなどの注目している種の生息確認を中心に観察しました。また、アマモに産み付けられたウミナメクジの卵塊(図3)や、モロハタマキビの卵塊(図4)も確認できました。

近木川河口周辺において2018年4月～6月に観察された鳥類			4月	5月	6月	
			4日	2日	6日	
目	科	種	13:25 鈴子	13:25 鈴子	13:25 鈴子	
カモ目	カモ科	ヒドリガモ	○			
		カルガモ	○	○	○	
		コガモ	○	○		
ハト目	ハト科	キジバト	○	○	○	
		ドバト	○	○	○	
		カワウ	○	○	○	
カツオドリ目	ウ科	カワウ	○	○	○	
ペリカン目	サギ科	アオサギ	○	○	○	
		ダイサギ	○	○	○	
		コサギ	○	○	○	
		オオバン	○	○	○	
ツル目	クイナ科	オオバン	○	○	○	
チドリ目	チドリ科	コチドリ	○	○		
		シロチドリ	○	○	○	
		メダイチドリ		○		
	シギ科	チュウシャクシギ		○	○	
		キアシシギ		○		
		イソシギ	○	○		
		カモメ科	コアシサシ		○	
スズメ目	カラス科	ハシボソガラス	○	○	○	
		ハシブトガラス			○	
		ヒバリ科	ヒバリ	○	○	
		ツバメ科	ツバメ	○	○	○
		ヒヨドリ科	ヒヨドリ	○	○	○
		ヨシキリ科	オオヨシキリ			○
		ムクドリ科	ムクドリ	○	○	○
		ヒタキ科	ツグミ	○		
			イソヒヨドリ	○		
		スズメ科	スズメ	○	○	○
		セキレイ科	ハクセキレイ	○	○	○
		アトリ科	カワラヒワ	○	○	
		ホオジロ科	アオジ	○		
			種数	24	24	18



図1. 二色の浜に生えるアマモ
(2018年4月21日)



図2. アマモの花
(2018年4月27日)

 **寄贈標本**

<鳥類>

- ◆福島秀人さんより
スズメ 死体 1点
貝塚市二色 2018年5月15日採集

<爬虫類>

- ◆匿名希望さんより
ミシシippアカミミガメ 生体 1点
貝塚市二色 2018年4月3日採集

- ◆吉野健次さんより
ミシシippアカミミガメ 生体 1点
(同定：和田岳さん)
岸和田市極楽寺町
2018年4月22日採集

- ◆匿名希望さんより
クサガメ 生体 1点
貝塚市二色の浜公園
2018年4月27日採集

- ◆油谷雅次さんより
ミシシippアカミミガメ 生体 1点
岸和田市大北町 2018年6月7日採集

<棘皮動物>

- ◆河添純子さんより
ヌメハダヒメヒトデ 1点
和歌山市加太 2018年4月19日採集

<軟体動物>

- ◆鈴子佐幸さんより
ウミナメクジ (茶色) 生体 2点
岬町深日港 2018年4月28日採集
- ◆中原光規さんより
クロシタナシウミウシ 生体 1点
和歌山市加太 2018年5月5日採集



図3. ウミナメクジの卵塊
(2018年4月21日)



図4. モロハタマキビの卵塊
(2018年4月21日)

本観察は4月21日には和田太一さん、4月27日には岩崎拓さんとともに実施しました。

(山田 浩二)

◆常道武士さんより

コベソマイマイ 生体 1点
ヒメタニシ 生体 3点
カワニナ 生体 1点
貝塚市橋本 2018年6月14日採集
ニッポンマイマイ属の一種 生体 2点
貝塚市橋本 2018年6月19日採集

<節足動物>

◆常道武士さんより

アメリカザリガニ 生体 1点
貝塚市堤 2018年4月1日採集
モクズガニ 生体 1点
貝塚市橋本 2018年4月1日採集
ゲジ 生体 2点
貝塚市澤 2018年5月28日採集
アカテガニ 生体 1点
大阪市住之江区 2018年6月22日採集

◆河添純子さんより

ゴイシガニ 1点 (採集: 三宅規子)
ヤマトホンヤドカリ 1点
和歌山市加太 2018年4月19日採集

◆河添純子さんより

サメハダオウギガニ 1点
トラノオガニ 1点
岬町長崎海岸 2018年5月30日



サメハダオウギガニ

<昆虫>

◆岩橋俊さんより

ノコギリクワガタ 成虫 1点
貝塚市名越 2015年6月20日採集
ノコギリクワガタ 成虫 1点
貝塚市馬場 2016年7月16日採集

◆佐々木龍さんより

ヤマトタマムシ 成虫 1点
貝塚市加神 2015年7月28日採集

◆佐々木仁さんより

クワカミキリ 成虫 1点
貝塚市脇浜 2017年6月22日採集
ヨツモンクロツツハムシ 成虫 1点
貝塚市千石荘 2018年4月12日採集
ミツボシツマキリアツバ 成虫 1点
ヒメカメノコハムシ 成虫 1点
貝塚市千石荘 2018年5月11日採集
キマダラカミキリ 成虫 1点
Endotricha 属の一種 成虫 1点
貝塚市千石荘 2018年6月2日採集

◆自然遊学館わくわくクラブより

マルクビケマダラカミキリ 成虫 2点
岸和田市河合町 2017年9月24日採集
(同定: 澤田義弘さん)
ゴマダラカミキリ 成虫 1点
貝塚市二色 2018年6月9日採集

◆常道武士さんより

ダビドサナエ属 幼虫 1点
貝塚市橋本 2018年4月1日採集
キマダラカメムシ 成虫 1点
貝塚市澤 2018年4月13日採集
マドガガンボ 成虫 1点
貝塚市澤 2018年4月18日採集
ウメエダシヤク 幼虫 1点
貝塚市澤 2018年4月21日採集

モンシロチョウ 幼虫 1点
貝塚市澤 2018年4月29日採集
ニセセマルヒョウホムシ 成虫 1点
貝塚市澤 2018年5月17日採集
ナミアゲハ 幼虫 5点
貝塚市澤 2018年5月18日採集
ツマグロヒョウモン 幼虫 2点
貝塚市澤 2018年5月26日採集
ウメエダシヤク 成虫 1点
貝塚市澤 2018年6月3日採集
モンシロチョウ 幼虫 13点
貝塚市澤 2018年6月11日採集
カノコガ 成虫 2点
貝塚市橋本 2018年6月19日採集
アカハネオンブバッタ 成虫 2点
貝塚市澤 2018年6月19日採集

◆西出康介さんより
キマダラカメムシ 成虫 1点
貝塚市脇浜 2018年4月11日採集

◆F.S.さんより
ナミテントウ 成虫 2点
ダンダラテントウ 成虫 1点
貝塚市二色 2018年4月12日採集

◆食野俊男さんより
オトシブミ 揺籃 9点
和泉葛城山 2018年5月15日採集

◆市立第5中学校より
ルリチュウレンジ 成虫 1点
貝塚市二色 2018年5月17日採集

◆鈴子佐幸さんより
カイコガ 繭 2点
飼育品 2018年5月24日、25日蛹化

◆山田茉帆さんより
ナミテントウ 成虫 1点
泉南市新家 2018年6月2日採集

<寄贈写真>

◆秋武仁志さんより
イカルチドリ 1枚
貝塚市近木川下流
2018年2月17日撮影
カンムリカイツブリ 1枚
貝塚市二色の浜 2018年4月1日撮影
ヨツボシトンボ 1枚
貝塚市馬場 2018年4月28日撮影
ネアカヨシヤンマ 9枚+動画2本
コオニヤンマ 1枚
貝塚市千石荘 2018年6月16日撮影

◆覚野良子さんより
アブラチャン 1枚
コガネネコノメソウ 2枚
タチネコノメソウ 2枚
シハイスミレ 2枚
ナガバタチツボスミレ 2枚
タムシバ 3枚
ダンコウバイ 3枚
トウゴクサバノオ 3枚
ニワトコ 3枚
ヒメクロモジ 6枚
フデリンドウ 3枚
ヤマルリソウ 2枚
ユリワサビ 3枚
ウスゲクロモジ 1枚
アオゲラ 2枚
マヒワ 1枚
ヤマドリの羽根 2枚
ほか 26枚
和泉葛城山 2018年4月1日撮影



ヒメクロモジ (雄花)
(和泉葛城山 2018年4月1日 覚野良子さん
撮影)



ウリノキ
(和泉葛城山 2018年6月3日 覚野良子さん
撮影)

オオルリ 1枚
ミソサザイ 1枚
ジャコウアゲハ 1枚
ほか10枚
和泉葛城山 2018年5月12日撮影
ケリ 3枚
タツナミソウ 1枚
ほか2枚
貝塚市馬場 2018年5月13日撮影
タツナミソウ 2枚
ヤマナメクジ 1枚
貝塚市千石荘 2018年5月13日撮影
ウリノキ 1枚
エゴノキ 1枚
カキノハグサ 1枚
サルナシ 1枚
ツルアジサイ 1枚
ナツトウダイ 1枚
ヤブイバラ 1枚
ホトトギス 5枚
アライグマ 2枚
和泉葛城山 2018年6月3日撮影

カキノハグサ 1枚
サルナシ 1枚
バイカウツギ 1枚
クロツグミ 2枚
ほか2枚
和泉葛城山 2018年6月9日撮影
クモキリソウ 3枚
イソヒヨドリ 2枚
ツバメ 1枚
ほか2枚
貝塚市蕎原 2018年6月10日撮影
イチヤクソウ 1枚
エゴノキ 2枚
オオバアサガラ 1枚
クワガタソウ 2枚
ササユリ 1枚
ツルアリドオシ 2枚
ほか4枚
和泉葛城山 2018年6月14日撮影
◆五藤武史さんより
ジャコウアゲハ 卵2枚
高石市浜寺公園 2018年4月20日撮影
◆北田誠さんより
ホタルカズラ 1枚

貝塚市馬場一稲谷
 2018年4月30日撮影
 キバナチゴユリ 1枚
 和泉葛城山 2018年5月1日撮影
 ナベワリ 2枚
 ナルコユリ 1枚
 和泉葛城山 2018年5月4日撮影
 キンラン 1枚
 貝塚市馬場 2018年5月9日撮影

- ◆岸武司さんより
 バラ 貫性花2枚
 阪南市舞 2018年4月30日撮影
- ◆西出龍生さんより
 アユ 3枚
 貝塚市堤 2018年6月4日撮影
- ◆佐々木仁さんより
 ギンツバメ 1枚
 貝塚市千石荘 2018年6月8日撮影

<目撃・鳴き声情報>

- ◆食野俊男さんより
 キアシシギ 4羽
 チウウシヤクシギ 1羽
 貝塚市近木川河口 2018年5月4日目撃
- ケリ 雛 数羽
 貝塚人工島 2018年5月27日目撃
 キジ 1羽
 貝塚人工島 2018年5月28日目撃
- ◆五藤武史さんより
 ヨツボシトンボ 2個体
 貝塚市馬場 2018年5月15日目撃
- ◆覚野良子さんより
 アナグマ 1個体
 和泉葛城山 (標高800m付近)

2018年6月3日目撃
 サンコウチョウ 鳴き声
 (鳴き声の録音ファイルも)
 2018年6月10日確認

<展示用標本>

- ◆貝塚市脇浜在住の方より
 台湾産ヨナグニサン 2点
 譲渡品

<鳴き声情報>

- ◆五藤武史さんより
 クマゼミ 初鳴き
 高石市羽衣公園丁 2018年6月25日

 お知らせ

夏期特別展

「きらめく石の世界展」開催中!



鉱物コレクター
 藤浦淳の
 きらめく
 石の世界展
 本展(ジャパニーズツイン)

7月21日(土)~9月2日(日)

産経新聞夕刊に「宝の石図鑑」を掲載中の同社の前文化部長が40年にわたって集めたコレクションを中心に公開。



貝塚市立自然遊学館(貝塚市二色3-26-1)

9:00~17:00 土日は9:00~19:30 火曜休館

貝塚市王子在住の鉱物コレクター、藤浦淳氏（産経新聞企画編集室）が40年にわたって収集した世界の鉱物を公開展示します。

場所：自然遊学館多目的室

期間：2018年7月21日～9月2日

火曜日休館

開館 25 周年記念イベント

10月に開館25周年を迎える自然遊学館では、下記の通り記念イベントを続々開催します。皆様のご応募をお待ちしています。

8月25日：和泉葛城山の鉱物と化石についての現地見学会

8月28日：水産技術センター見学と住吉崎磯観察会

9月16日：和泉葛城山の鉱物と化石についての講演会

9月29日：和泉層群の化石と鉱物についての現地見学会

スタッフ日誌

5月11日、第2金曜日に実施している千石荘講座の際に、ハルゼミ（1♂）の鳴き声を聞きました。府下でも、主な生息場所であるアカマツ林の衰退とともに減少していると考えられ、大阪府レッドリストで準絶滅危惧に指定されています。これまでの自然遊学館の記録を当たってみても、当地での確認例はありませんでした（市内で確認

例が多いのは和泉葛城山山頂）。なんで今頃になって？、という思いはありますが、千石荘の貴重種の記録が1種増えたことを喜びたいと思います。（岩）

5月25日、木積西幼稚園から「虫が好きなきが多いから」とお呼びがかかり、館から持って行った昆虫標本や生体の話をし、その後、園庭に出て昆虫採集をしました。ツマグロヒョウモンの棘棘の幼虫を持って来る子もいたり、標本で少し説明した「大物」が2匹も採れたりして、ホットな時間を過ごしました。（岩・澤）

6月12日、展示ホールのエアコンの交換作業を行ってもらいました。天井埋め込み型の2台の大型のエアコンで、開館以来25年近くたち、これまでも何度か故障しては修理の繰り返しでしたが、昨年ついに修理不能になりました。新しいエアコンは静かでパワフル、この夏は例年になく猛暑ですが、展示ホールは涼しく快適に過ごせるようになりました。（山）

* 自然遊学館だよりのバックナンバーは、下記のホームページよりご覧いただけます。

自然遊学館だより 2018 夏号 (No. 88)

貝塚市立自然遊学館

〒597-0091

大阪府貝塚市二色3丁目26-1

Tel. 072 (431) 8457

Fax. 072 (431) 8458

E-mail: shizen@city.kaizuka.lg.jp

<http://www.city.kaizuka.lg.jp/shizen/>

発行日 2018. 8. 15

この小冊子は市内印刷で作成しています。